

第 15 回(2022 年度)JACET 関東支部大会

●○○ 大会テーマ ●○○

The Exploration of New Forms of Study Abroad

日 程 /	2022 年 7 月 9 日 (土)	July 9th, 2022
Z o o m 開 設 /	8 時 35 分より	Access starts at 8:35 a.m.
参 加 費 /	JACET 会員は無料 非会員は 2,000 円	Admission FREE for JACET member; 2,000 yen for non-member
事前申込 URL /		URL for Registration /

<https://forms.gle/5jJvV4XgioxY9ThV9>

大会はすべてオンライン (Zoom) で行われますが、青山学院大学青山キャンパスの以下の教室から参加することも可能です。来場希望者は、申込時にその旨を回答して下さい。

青山学院大学青山キャンパス (〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25)
17 号館 5 階 17506 教室 (定員 72 名) と 17507 教室 (定員 63 名)

<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

E-mail: takane46@gmail.com (大会運営委員長 山口高領)
大会に関するお問い合わせはこちらへ。

●○○ タイムテーブル ●○○

午前

9:00-9:30 (Main Room)	*実践報告 (Breakout 使用)「新たなる留学形態を模索して—オンデマンド留学の可能性—」 関戸冬彦・水沼早希 (白鷗大) 司会: 青木理香
9:30-9:40 (Main Room)	賛助会員 LT (金星堂)
9:40-10:10 (Room1)	研究発表「L2 Brain Connectome Re-structuring by Studying Abroad」 Hideyuki Taura (立命館大) 司会: Paul McBride
9:40-10:10 (Room2)	研究発表「英語科教職課程履修生による模擬授業に対する省察—深い省察を促す取り組みへ向けて—」 大崎さつき (創価大) 司会: 馬場千秋
10:10-10:20 (Main Room)	賛助会員 LT (三修社)
10:20-10:50 (Room1)	*研究発表「ディベートを日本の大学教育に取り入れる示唆—オックスフォード・ユニオンの事例研究—」 中谷安男 (法政大) 司会: 辻りこ
10:20-10:50 (Room2)	研究発表「学生から見た少人数・習熟度別クラス編成の評価—アンケートとインタビューに基づいて—」 志村美加・中竹真依子・小杉弥生 (学習院大) 司会: 小屋多恵子
10:50-11:00 (Main Room)	賛助会員 LT (朝日出版社)
11:00-11:30 (Room1)	*実践報告「自動翻訳時代に課す英訳問題の取り組みについての実践報告」 大味潤 (東京経済大・非常勤講師) 司会: 渡辺彰子
11:00-11:30 (Room2)	*賛助会員発表「対話で伸ばす英語ディスカッション教科書の紹介」 飯野厚・Brian Wistner (法政大) 司会: 河内山晶子
11:30-11:45 (Main Room)	賛助会員 LT (金星堂) 賛助会員 LT (三修社) 賛助会員 LT (朝日出版社)

午後 (Main Room)

12:30-12:50	2022 年度第 1 回支部総会
12:50-13:00	賛助会員 LT (金星堂)
13:00-14:30	* Keynote Speech “An epoch-making time in the evolution of language teaching: The era of Virtual Exchange” Eric Hagley (法政大)
14:30-14:40	賛助会員 LT (三修社)
14:40-16:10	* Workshop “How to introduce your students to an international community: the IVEProject” Eric Hagley (法政大)
16:10-16:20	賛助会員 LT (朝日出版社)
16:20-16:25	関東支部 バイリンガリズム研究会の紹介
16:25-17:30	* 関西支部 教材開発研究会発表「英語教育における授業複線化と即時フィードバックの試み」 神谷健一 (大阪工業大)・山内真理 (千葉商科大)
17:30	Closing

注：*は、JACET 会員で視聴申し込みをした方が 7 月末まで録画視聴できるものです。

●○● ご案内 ●○●

大会はすべてオンライン（Zoom）で行われますが、青山学院大学青山キャンパスの以下の教室から参加することも可能です。来場希望者は、申込時にその旨を回答して下さい。また、青山キャンパスでは eduroam が使えます。当日のみ使えるアカウント希望の方は、申込時にその旨を回答して下さい。青山学院大学青山キャンパス（〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25）

17 号館 5 階 17506 教室（定員 72 名）と 17507 教室（定員 63 名）

<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

当日ご都合がつかない JACET 会員を対象に、発表者の許可を得たものに限って録画視聴を可能にしました。視聴をご希望の方は、申込時にその旨を回答して下さい。視聴は 7 月末日までとします。視聴ご希望者には、大会終了後に URL をお送りします。

また、記録のためにすべての発表を録画する予定であることをご了解下さい。

参加（録画視聴）方法について

(1) JACET 非会員の方は、この機会に会員になることをご検討下さい。この支部大会の参加料が無料になるだけでなく、今年度のイベントの参加やジャーナル入手などの特典があります。入会情報はこちらをご覧ください。

https://www.jacet.org/about_jacet/how_to_join_jacet/

(2) 本支部大会に参加希望の方は、以下の事前申し込みフォームに回答をお願い申し上げます。事務処理上、6 月末日までに回答を下さいますと助かります。

<https://forms.gle/5jJvV4XgioxY9ThV9>

回答終了後、回答のコピーがメール送信されます。受信できない場合にはメールアドレスの入力誤りの可能性があります。修正がありましたら速やかにご修正下さい。

(3) JACET 会員であることや、非会員の方が入金したことを確認後、当日の Zoom URL やお願い事項を、6 月末日にはお知らせします。7 月に入ってから毎日確認する予定ですが、お待ちいただくことがあります。

(4) 7/9 (土) の支部大会当日は、申し込み時に送信されたメールの中にある Zoom URL をクリックして Zoom にお入り下さい。そこが Main Room となります。支部総会・基調講演・ワークショップなどは Main Room で行います。Room 1 や 2 が設置されている場合は、各 Room に移動して発表をお聴き下さい。

大会を円滑に進めるため以下の点にご留意下さい。

- (a) 参加なさる際は、ご自身のマイクをオフにしてください。
- (b) ご質問はチャット機能をご利用ください。発表中いつでも書き込むことができます。できるだけ皆様のご質問にお答えいただけるような進进行を努めますが、時間の制限によりできない場合もごさいますことをご了承ください。
- (c) ヘッドセットまたはイヤホンをご利用いただくとより良い音でご参加いただけます。
- (d) Zoom Web 会議の URL は公開しないでください。
- (e) 録画、録音等をしないでください。
- (f) Zoom にて表示されるお名前は、本名でアルファベット表記にしてください。

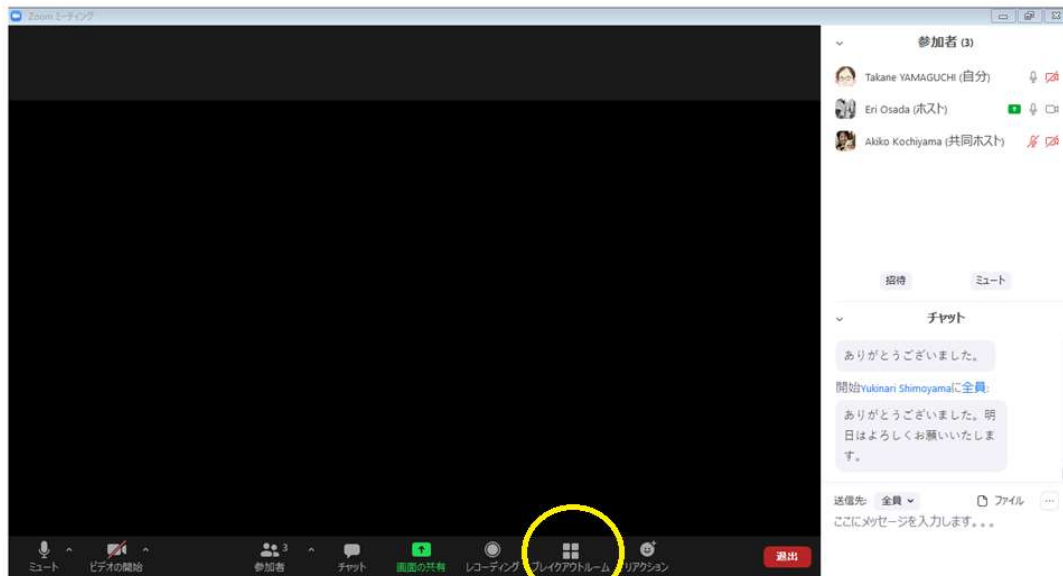
(参考) Zoom 会議中に表示される自分の名前変更をする方法

<https://symphonict.nesic.co.jp/workingstyle/zoom/change-name/>

(5) Room 1 や 2 に移動したり、Main Room に戻る方法

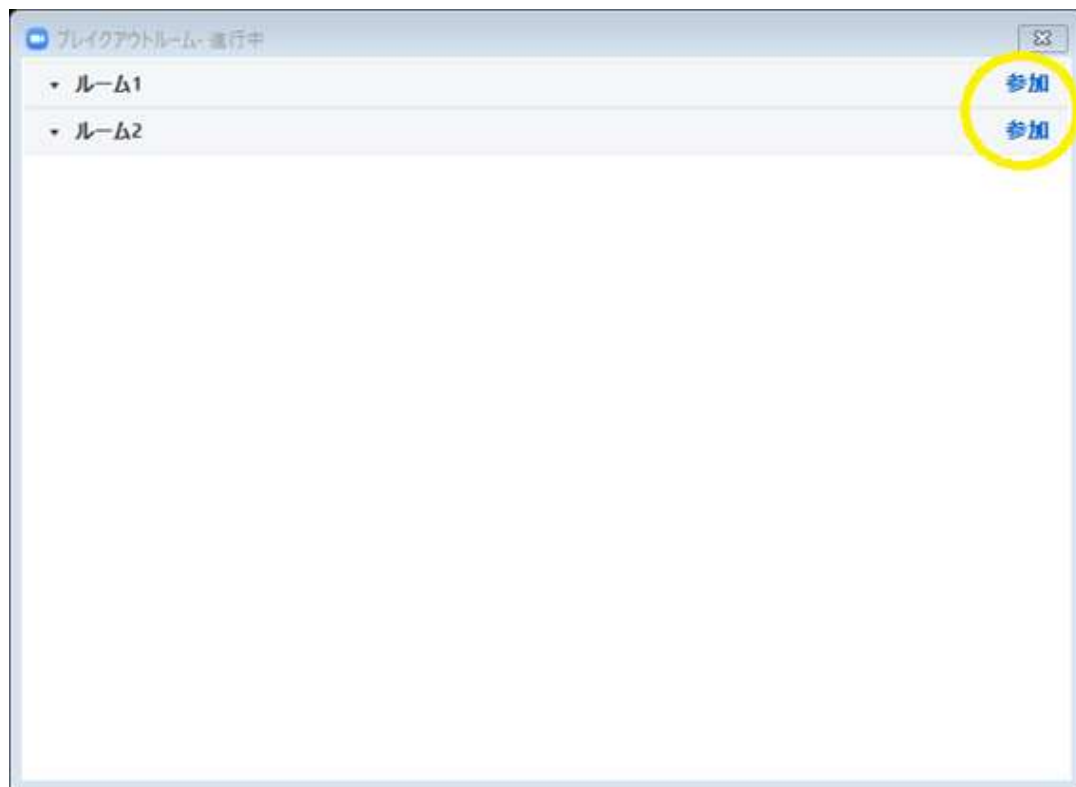
① 図 1 中の黄色の○で囲んだ部分にあるように「ブレイクアウトルーム」をクリック

図 1



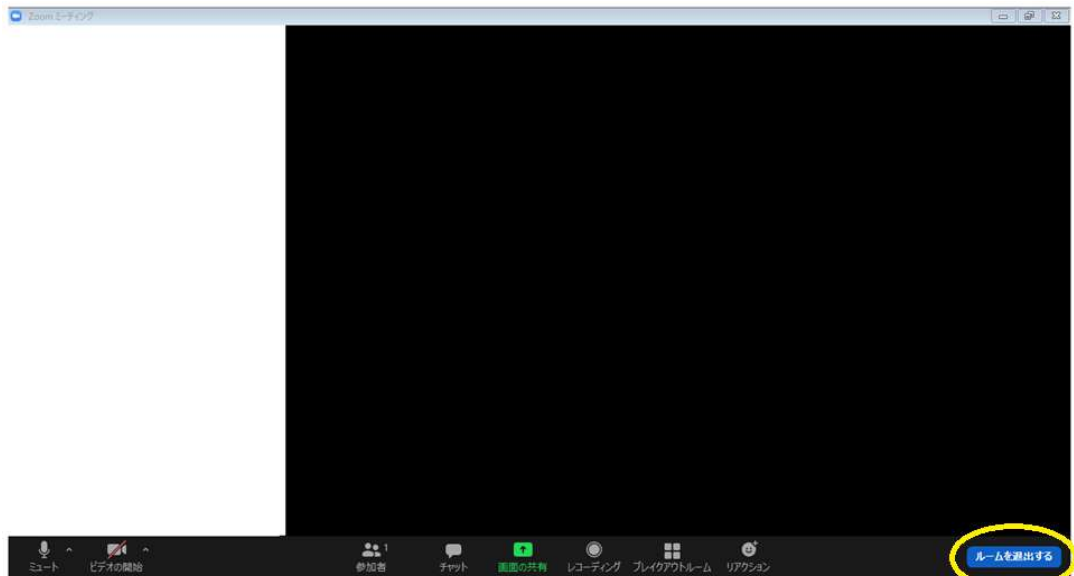
②図 2 中の黄色の○で囲んだ部分にある「参加」という文字をクリックして入室できます。入りたいルームと同一行の「参加」をクリックしてください。

図 2



③別のルームに移動を希望する場合は、まず、図 3 中の黄色の○で囲んだ部分にあるように、「ルームを退出する」という文字をクリックしてください。

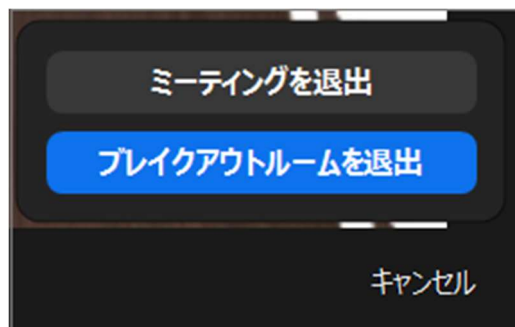
図 3



④「ルームを退出する」という文字をクリックすると、図 4 にあるように、「ミーティングを退出」と「ブレイクアウトルームを退出」を選択できます。「ブレイクアウトルームを退出」をクリックすると、**Main Room** に戻りますが、「ミーティングを退出」という文字をクリックすると、**Zoom** を終了します。

図 4(<https://zoom-support.nissho->

[ele.co.jp/hc/ja/articles/360022809332-%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%B8%E3%81%AE%E5%8F%82%E5%8A%A0](https://zoom-support.nissho-ele.co.jp/hc/ja/articles/360022809332-%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%B8%E3%81%AE%E5%8F%82%E5%8A%A0))



●○● 目次 ●○●

ご挨拶

JACET 会長 小田眞幸（玉川大学）	1
---------------------------	---

ご挨拶

JACET 関東支部支部長 山口高領（秀明大学）	2
--------------------------------	---

* 実践報告（Breakout 部分録画なし）「新たなる留学形態を模索して—オンデマンド留学の可能性—」

関戸冬彦・水沼早希（白鷗大学）	3
-----------------------	---

研究発表「L2 Brain Connectome Re-structuring by Studying Abroad」

Hideyuki Taura（立命館大学）	5
-----------------------------	---

研究発表「英語科教職課程履修生による模擬授業に対する省察—深い省察を促す取り組みへ向けて—」

大崎さつき（創価大学）	6
-------------------	---

* 研究発表「ディベートを日本の大学教育に取り入れる示唆—オックスフォード・ユニオンの事例研究—」

中谷安男（法政大学）	8
------------------	---

研究発表「学生から見た少人数・習熟度別クラス編成の評価—アンケートとインタビューに基づいて—」

志村美加・中竹真依子・小杉弥生（学習院大学）	10
------------------------------	----

* 実践報告「自動翻訳時代に課す英訳問題の取り組みについての実践報告」

大味潤（東京経済大学 非常勤講師）	12
-------------------------	----

* 賛助会員（金星堂）発表「対話で伸ばす英語ディスカッション教科書の紹介」

飯野厚・Brian Wistner（法政大学）	14
-------------------------------	----

* Keynote Speech “An epoch-making time in the evolution of language teaching: The era of Virtual Exchange”

Eric Hagley（法政大学）	16
-------------------------	----

* Workshop “How to introduce your students to an international community: the IVEProject”		
Eric Hagley (法政大学)	18
* 関西支部 教材開発研究会発表「英語教育における授業複線化と即時フィードバックの試み」		
神谷健一 (大阪工業大学)・山内真理 (千葉商科大学)	19
* 発表査読者	21
* 賛助会員 LT	21
* 支部大会運営組織	21
* Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 10	22

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER
大学英語教育学会（JACET）関東支部会員各位

大学英語教育学会会長
小田眞幸（玉川大学）

ご挨拶

日頃の学会活動にご参加いただきましてありがとうございます。

この度は第15回（2022年度）JACET 関東支部大会が2022年7月9日（土）に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。新年度を迎え、多くの大学では対面授業が再開され、キャンパスに活気が戻りつつあります。これを受けて、当初は「コロナ前」に戻すという考え方が中心であった大学英語教育についても、この2年間で蓄積した「財産」をどうすれば有効利用できるのかという考え方に変わりつつあります。

今年度の関東支部大会は「The Exploration of New Forms of Study Abroad」というテーマで、多くの大学でここ数年中断しなければならなかった活動に焦点を当て、「留学」「海外研修」に代わるものとして各大学でどのような活動が行われたか、そしてこの2年間で大学英語教育界が取り組んだ、オンラインによる教育活動の実践の様々な事例、そして教室での対面授業が再開された今、「コロナ後」の大学英語教育が進むべき方向性について議論を行うというタイムリーなプログラムが組まれています。

ご存じの通り関東支部におかれましては他支部に先駆けて2020年8月の第13回支部大会を完全にオンラインで開催するという画期的な試みを行い、これまでは支部会員が中心であった参加者が全国、あるいは海外まで広がるという新たなスタイルを作りました。今年度も全国からの参加者、発表者をお迎えし活発な議論が行われることを期待します。

新型コロナウイルスの今後の感染状況またそれにともなう教育現場の対応についてはまだしばらく不透明な状況が続くとは思いますが、本大会の発表者、参加者、賛助会員の皆様、そして企画運営に関わった関東支部の委員の皆様には深く感謝いたします。

学会としても支部大会を通して大学英語教育にさらなる貢献ができればと思います。関東支部大会のご成功をお祈りいたします。

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

本大会にご参加のみなさま

大学英語教育学会関東支部支部長
第15回 JACET 関東支部大会委員長
山口高領（秀明大学）

ご挨拶

昨年度に続き、Zoom を使ったオンラインでの開催でございます。本大会では、基調講演・ワークショップに、Eric Hagley 先生（法政大学）をお招きできました。また、従来のように、賛助会員によるライトニングトーク（LT）、研究発表・実践報告の他、SIG 紹介・発表もでございます。オンラインの大会ならではのでしょうか、関西支部の SIG による発表もでございます。

今回も申込者に Zoom URL を1つお知らせしています。Zoom に入った場所を Main Room とし、ご希望に応じて、Room 1 と Room 2 に入るという体制にしました。ご興味に応じて Room 1 と Room 2 にて参加内容を選べます。

今回は、佐竹由帆先生（青山学院大学）にご協力いただき、当日には青山学院大学の教室から参加することも可能となりました。感染対策には気をつけつつ、対面での情報交換などにご活用いただければ幸いです。

また、今回は、JACET 会員に限り、申込者に当日の録画を視聴できる体制を作りました。多くの録画を7月末日までご覧になれます。また、記録のためにすべての発表について録画されることをご理解の上でご参加下さい。

今回の発表審査には、10名の先生にご協力頂きました。Paul McBride 先生（玉川大学）、伊藤泰子先生（神田外語大学）、小張敬之先生（青山学院大学）、小屋多恵子先生（法政大学）、佐野富士子先生（元 横浜国立大学）、下山幸成先生（東洋学園大学）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、馬場千秋先生（帝京科学大学）、藤枝豊先生（共愛学園前橋国際大学）、藤尾美佐先生（東洋大学）、各先生にお礼を申し上げます。

また、大会運営に当たりまして、多くの先生方にご協力頂きました。副支部長の Paul McBride 先生（玉川大学）、会員のみなさまへの連絡のお手伝いをしてくださった、事務局幹事の長田恵理先生（國學院大學）、新井巧磨先生（早稲田大学）、中山夏恵先生（文教大学）、Host や Co-host の役割も積極的に引き受けていただきました運営委員の先生方、今回の LT にご協力をいただきました賛助会員の朝日出版社さま、金星堂さま、三修社さまにも、改めましてお礼申し上げます。

どうぞ今後とも、JACET および関東支部の益々の発展に向けてご尽力いただけますよう、よろしく願い申し上げます。

新たな留学形態を模索して—オンデマンド留学の可能性—

Exploring of New Forms of Study Abroad: On-Demand Study Abroad and its Possibilities

関戸冬彦・水沼早希（白鷗大学）

はじめに

周知のとおり、ここ2年ほど新型コロナウイルスの世界的流行により、従来の意味における留学、つまり海外に渡航して学ぶ、はとても困難な状況になり、その影響は今なお続いているといつてよい。そこで、こうした状況を逆手にとり、そもそも留学することの意味、意義を真摯に問うのであれば、国内にいても、ないし、いながらも可能なことは幾ばくかあるのではなからうかという視点に立ったとき、オンデマンド留学という発想が生まれた。本発表ではそのプログラムの概略的説明をまずは施し、そしてこれまで行ってきた内容の紹介、そして参加者の反応の分析、最後に今後の可能性についても言及したい。また、時間が許すのであればフロアの先生方からのご意見やご見解を共有する時間ともしたい。

1 オンデマンド留学とは何か

執筆者が所属している白鷗大学では各学部独自の留学プログラムもあれば、大学として管轄しているプログラムもある。後者は国際交流サポートセンターがその運営にあたっており、本発表で触れるオンデマンド留学プログラムも当センター主催という形で行っている。ここではまず、オンデマンド留学プログラムとは何かについて説明する。オンデマンド留学とは、コンテンツ（主に TED TALK のような英語で発信されている動画）を視聴し、その内容についてオンラインビデオ会議システム、Zoom を経由して英語で会話、討論するというものである。要は反転授業をオンラインで行い、かつその使用言語を英語にする、というところからやりやすいだろうか。先に述べたように、そもそも留学とは何かを考えてみると、語学研修と答える学生もいるかもしれないが、それだけであれば十分国内にいても可能であり、普段学んでいない、あるいは動機づけがあがらない、ことの言い訳のようにも聞こえる。そうではなく、外国語を駆使して何かを学ぶ、つまり学ぶべき対象に母国語以外で挑む、という姿こそが留学という学びの大きな側面の

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

ようにも思える。よって、オンデマンド留学はその部分、英語を駆使して何かを学ぶ、に焦点をあてたプログラムとしてスタートした。

2 実施方法と参加者の反応

さて、実際の実施方法であるが、オンラインとはいえ、ある程度の適切な人数や実施時間は当然存在する。当プログラムでは原則として4人1チームにファシリテーター1人をつけた5人体制を基本としている。なぜ4人かという問いに対する答えとしてはいろいろ理由づけが出来るが、ひとつのトピックについて全員が均等に話すことを考えたとき、これまでの授業などの実践知、経験則から4人が最も適切であるとの判断に至った。もちろん、これはスタート時点での話であり、実際には様々な状況があり、それには臨機応変に対応した。そうした詳細については発表内で触れる。なお、時間は1時間、週に1度を4回、つまり1か月で1クール完結のプログラムにして、2021年5月に第1期をスタートさせた（6月に第2期、10月には第3期を行った）。扱った内容に関しては、先に述べた、英語を駆使して何かを学ぶ、にふさわしい動画を選び、事前に視聴してもらい、専用シートに内容の要約や質問などを記入、これが事前準備となる。活動時間の1時間はこれを基に対話、議論を行う。終了後は同じく専用シートにその日の学びとそれを活かした自身の行動に関するコメントを記入し、Teams上のチームスレッド内にて共有する。こうした一連の流れも、第1期（正確には2021年3月に第0期としてパイロット的な試みは行っていた）をやりながら随時改訂、改良を施し、その時点でベストと思えるものを各期で行った。よって最新のものが最良という、常時バージョンアップを施しながら行っているのもひとつの特徴である。具体的な内容やさらなる詳細な手順、またそれぞれの期終了後の参加者のコメントやアンケート結果なども発表内にて公開し、紹介や分析を行いたい。

3 今後の可能性について

これまで述べてきたものは2021年度に実施、実践したものである。本プログラムは2022年度も継続して行っており、これまでは執筆者が、特に内容に関してはある程度方向性づけをするべくディレクションなどをしてきたが、現在はこのプログラムに参加した経験者たち、あるいは国際交流センターで活動しているSIPSメンバーたち、が率先して自律的に運営を行ったりもしている。そうした点も含め、最新の現状を報告すると共に、このプログラムをよりよくしていくために出来る点、あるいはさらなる可能性や発展性についても言及してみたい。

海外留学による脳内コネクトームへの影響

L2 Brain Connectome Re-structuring by Studying Abroad

Hideyuki Taura (Ritsumeikan University)

The effects of studying abroad (SA) have been chiefly researched from the perspectives of CAF (complexity, accuracy, and fluency), but only a scant amount of research has addressed the issue neuro-linguistically. This study follows on from Taura's (2022) research examining both linguistic and neuro-linguistic aspects of the SA effect. Three Japanese learners of English were tracked for a year when they attended local high schools or universities in English dominant milieu. The results showed linguistic improvement in spoken/written fluency, vocabulary, and writing skills, while the hemodynamic data were indicative of more efficient L2 processing in the Inferior Frontal Gyrus (IFG, mostly overlapping with Broca's motor speech centre area) post-SA. Idiosyncratic features emerged neuro-linguistically among the three participants when pre-departure brain activation data were compared to post-departure data. The present study focuses on the connectome of their brains, rather than simply the activation in Broca's area alone. Full details are presented at the conference.

Reference

Taura, H. (2022). Studying Abroad and its Effects on L2 Brain Structures. *JAAL in JACET Proceedings*, 4.

英語科教職課程履修生による模擬授業に対する省察
—深い省察を促す取り組みへ向けて—

**Investigation to Promote Student Teachers' Reflection in
Pre-Service Teacher Education**

大崎さつき (創価大学)

1. 研究の背景

目まぐるしく変動する時代において、教師が自律して成長し続けるためには、省察が重要であることは広く認知されてきた。そのため、成長し続ける教師を育成するための取り組みとして、筆者は『言語教師のポートフォリオ (J-POSTL) 【英語科教職課程編】』(JACET 教育問題研究会、2014) を教職履修課程の英語科教育法で活用してきた。模擬授業での履修生の省察については、一定の振り返りができていると感じるが、他の履修生からのフィードバックやアドバイスを無批判に受け入れたり、問題点に対してすぐに代替案を求める傾向があるように感じている。そこで、本研究では、主に模擬授業後のリフレクティブ・エッセイの記述を分析し、J-POSTL を活用した模擬授業指導が履修生の省察にどのような影響を与えるのか、そして、省察の深さを分析するために、コルトハーヘン (1985、2010) が省察をより精緻化し教員養成のモデルとして提示している ALACT モデルのどの段階に相当する省察ができているかを特定しようと試みた。さらに、そこから浮かび上がる省察プロセスを深化させるための課題点を把握し、今後どのように ALACT モデルを活用することができるかについて検討することを本研究の目的とする。

2. ALACT モデル

ALACT モデルとは、Korthagen (1985) が経験による学びの理想的なプロセスを次の5つの局面に整理したものである: 第1局面「行為」、第2局面「行為の振り返り」、第3局面「本質的な諸相への気づき」、第4局面「行為の選択肢の拡大」、第5局面「試み」。教師が省察を行う場合、本質的な問題に目を向けずに、即効性のある改善策を見つけようとしがちである。だが、そこには教師の専門性の成長を停滞させる危険性があるという (Korthagen, 2015)。つまり、第3局面の「本質的な諸相への気づき」なしには様々な状況に応じて求められる資質能力を生涯にわたっ

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

て高めていくのが難しいということだ。そこで、本研究では、履修生が本質的な問題にまで気づけているか、そうでない場合は、今後、模擬授業の省察を深めるための工夫としてどのようなことが考えられるかをコルトハーヘン（2010）の「8つの問い」やリアリスティック・アプローチの観点から検討する。

3. 研究課題（Research Questions）

RQ1. J-POSTL の使用は、ALACT モデルの第 2 局面の行為の振り返りに影響を与えているか。

RQ2. 履修生は ALACT モデルの第 3 局面の段階の省察ができていないか。

RQ3. ALACT モデルの第 3 局面を促すためにできる今後の工夫とは何か。

4. 研究方法

4.1 被験者

秋学期の履修生 29 名のうち、3 回のピア・ティーチングと 1 回の模擬授業、そして 4 回の J-POSTL による自己評価を完了した 18 名を本研究の被験者とした。

4.2 主な分析方法

履修生が「本質的な諸相への気づき」ができていないかについて、各履修生のリフレクティブ・エッセイを詳細に読み込み、テキストをまとまりごとに切り取り、ALACT モデルの 5 つの局面に分類した。信頼性を確保するため、最初の分類作業から少し時間を置いた後、テキストの断片化の適切性や、各局面への分類について見直し、分類の適切性を確認した。

5. 結果と考察

RQ1. : リフレクティブ・エッセイを書く際に、模擬授業で見つかった課題点について、J-POSTL の自己評価記述文を使用することで、具体的に問題点を描写することができ、振り返りを促進できている可能性が示唆された。

RQ2. : 被験者 18 名のうち 4 名の被験者においては、第 3 局面とみられる「本質的な問題」についての言及が見られた。そのほかの履修生の省察は、第 2 局面にとどまっているか（8 名）、第 2 局面からすぐに第 4 局面「行為の選択肢の拡大」に移行していた（6 名）。

RQ3. : 次回の英語科教育法の授業において、模擬授業後の協議の工夫（「8 つの問い」の導入）やフィードバックを与える時に、コルトハーヘン（2010）が提案する教師教育者が履修生の深い省察を促すための援助の観点を取り入れる。

ディベートを日本の大学教育に取り入れる示唆
—オックスフォード・ユニオンの事例研究—

**How to Introduce Debate Training into Japanese Contexts:
A Case Study of Oxford Union**

中谷安男（法政大学）

英語学習者の発話能力向上を目指す様々な取り組みがある。しかし問題解決能力も身に着ける手法として、英国のパーラメント形式に基づくディベートの指導方法を提示した例は多くない。本論は世界最大の学生組織であるオックスフォード・ユニオン（Oxford Union：OU）の事例に注目し、インタビューや録音データを基にディベート教育の有効性を検証する。

1 OUディベート研究背景

オックスフォード大学は世界大学ランキングで1位に選ばれている。ノーベル賞受賞者47名を輩出し、英国首相28人だけでなく、米国クリントン大統領やインドのガンジー首相など世界的な政治家もここで学んだ。このような伝統から世界中の優秀な研究者や、将来のリーダーを目指す若者を惹きつけている（中谷, 2022）。

特にリーダーを目指す学生は全学的組織のOUに在籍することが多い。OUは1825年設立の学生によるディベート団体で、英国史に残る伝説的なディベートが行われてきた。特に有名なのは、1933年2月9日行われた「国王と国家のために戦争を行わない」という動議（Motion）のディベートである（Graham, 2005）。これが採択され、結果的にナチスドイツのヒトラーやイタリアのムッソリーニがヨーロッパ侵攻を決意したという伝説がある（Ceadel, 1979）。以後この決議は「オックスフォードの誓い（Oxford Pledge）」として広まり、世界の大学生の平和運動の後ろ盾となる。OUはパキスタンのブトー首相、英国のメイ、ジョンソン首相なども輩出している。

欧米では著名なOUであるが、日本ではあまり注目されてこなかった。特に、そのトレーニングについて具体的な報告はほとんどない。以上の点から、本発表ではOU所属者へのインタビューや、トレーニングに参加し調査した結果の報告を行う。

2 調査手法

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

質的調査として OU に関する刊行物による報告を参照し、基本的な調査の枠組みを構築した。その後、2019-2020 年に在籍者 30 名に学習方法について 20 分ほどインタビューを実施した。さらに、著者自身が毎週日曜日の初級者向けのワークショップに参加し録音した音声データを資料として活用した。

3 結果の示唆

3.1 多量の読書による社会的課題の事前知識の構築

OU では世界大学ディベート選手権方式に沿い、動議はディベート開始の 15 分前に提示される。このため動議内容の予習は困難で、事前に豊富な知識を持つ必要がある。SDGs 等グローバルな課題を扱うため、日頃から新聞や書籍を精読し、問題意識を構築しておく必要がある。このため大学には書籍が充実し 101 以上図書館がある。

3.2 豊富なディベート機会と丁寧なフィードバック

ディベートを入学後に始める者も多く、豊富な学ぶ機会が設けられている。学習者は、学期中に毎週行われる、初・中・上級のレベル別のワークショップに参加する。世界で活躍する上級生が指導を担当し具体的方法を基本から伝授する。毎回必ず実際のディベートを行い、参加者ごとに丁寧に詳しいフィードバックを与える。これ以外に、女性向け、ESL 学習差向けもある。大学自体がディベートを重視しており、OU 以外にも毎日のように大きなディベートが行われている。OU のトレーニングを受けた学生たちは、これらの機会を積極的に活用し、最初は聴衆として参加し、次第にディベーターとして発話の機会を積んで技術を身に付けている。

4 まとめ

日本の大学においては、いきなり英語のディベートを行うのは敷居が高いと思われる。しかし、OU のトレーニング初級のコースは、まさに手取り足取りであり、この手法を日本で活用していくことは有効であろう。また、ディベートを通して SDGs などの社会的課題にかなり関心を持つことが可能になり、トレーニングに参加することで、問題解決能力を高めることも望める。

参考文献

Ceadel, M. (1979) The 'King and Country' Debate, 1933: Student Politics, Pacifism and the Dictators. *The Historical Journal*, 22:2, 397-422.

Graham, F. (2005) *Playing at Politics*. Edinburg: Dunedin Academic Press.

中谷安男 (2022) 『オックスフォード世界最強のリーダーシップ教室』中央経済社

学生から見た少人数・習熟度別クラス編成の評価
—アンケートとインタビューに基づいて—
**University Students' Perceptions of Small-size
and Streamed English Classes**

志村 美加 (学習院大学)

中竹 真依子 (学習院大学)

小杉 弥生 (学習院大学)

1. はじめに

学習院大学外国語教育研究センターでは、一般教養科目としての英語プログラムの改編を、コロナ禍のため多くのクラスがオンライン形式で開講される中、段階を経て実施することとなった。第1段階として、2021年度は、少人数・習熟度別クラス編成を3学部で開始した。本研究は、学生が少人数・習熟度別クラス編成をどのように捉えているのかを Web アンケートとインタビューを通して分析し、どのような改編がより良い英語プログラムの運営へと繋がるのかを検討する。

2. Web アンケートとインタビューの実施

本研究で行った Web アンケートとインタビューの詳細は下記のとおりである。

2.1.1. 調査対象者

対象となる学生は、2021年度に一般教養科目の英語リーディング・クラスを履修した1・2年生である。1年生のクラスでは、少人数・習熟度別クラス編成が法学部、文学部、理学部で開始され、2年生のクラスでは、2020年度までの形式を継続し、法学部政治学科と理学部のみで習熟度別クラス編成が行われた。

2.1.2. Web アンケートとインタビュー

Web アンケートは、1学期末と2学期末の2回にわたって実施した。本研究では、2学期末のアンケートの中から少人数クラス編成と習熟度別クラス編成、授業レベルに関する項目を取り上げる。無効回答や未回答の学生を除いた回答者数は1年生860名、2年生497名の計1,357名である。2学期終了後、アンケート項目への回答理由を尋ねるため、学生にインタビューを行った。インタビューは2月にZoomを使って行い、インタビュー協力者は1年生12名、2年生9名の計21名である。

3. アンケートとインタビューの回答分析

3.1. 少人数クラス編成

アンケートでは、履修したクラスの履修人数が「ちょうど良い」と回答した学生は、1年生は93.0%、2年生は92.1%だった。

インタビューを通し、学生に回答の根拠を確認したところ、「4～5名の適切な人数で Group work ができた」ことを理由として挙げた学生が、1年生は6名（1年生の50%）、2年生は6名（2年生の66%）、「教員やクラスメートとコミュニケーションがとりやすかった」ことをあげた学生は、1年生4名（33%）だった。

3.2. 習熟度別クラス編成

アンケートでは、習熟度別クラス編成は有効かどうかを尋ねた項目に、「そう思う」・「ややそう思う」と回答した1年生は81%、2年生は74%だった。

学生に回答の根拠をインタビューで確認したところ、「同レベルの人と学ぶ場合、同じような箇所ですみずくため、お互いに質問しやすく安心もできる」または「英語ができる人に頼らず自分で取り組むため勉強になる」という点を挙げた学生が、1年生は6名（50%）、2年生は7名（78%）に上った。また、「英語が不得意な人が混じると説明に時間を割く必要が生じ、課題にかけることができる時間が短くなる」ことを挙げた1年生は1名（8%）、2年生は2名（22%）だった。

3.3 授業レベルの適正

アンケートでは、授業のレベルが「ちょうど良い」と回答した1年生が74.3%、2年生が71.9%だった。また、「易しすぎる」・「少し易しい」と回答した1年生は13.6%、2年生は9.3%、「少し難しい」・「難しすぎる」と回答した1年生は12.1%、2年生は18.8%だった。

インタビューでは、「高校よりも教科書が易しい」ことを挙げた1年生が5名（42%）、2年生が3名（33%）だった。その一方で、「新しくプレゼンテーションや英語の論理展開法、リサーチ方法を学べた意義」を挙げた1・2年生が3名いた。また、「予習・復習には1～1.5時間が適切」だと考える1・2年生が6名いる一方で、「2時間を超える場合は負担」に感じる学生が多かった。

4. 結論

少人数クラス編成に関しては、適切な人数と考える学生が大半を占め、コミュニケーションの取りやすさが要因となることが明らかになった。習熟度別クラス編成に関しては、学生同士が相談しながら安心して学ぶことができる環境を得るために必須であることが分かった。また、授業レベルに関しては、英文のレベルを上げる必要性や、大学入学後に新しいスキルを学ぶ機会の重要性が明らかになった。

自動翻訳時代に課す英訳問題の取り組みについての実践報告 English-Japanese Translation Assignment in AI-Translation Era

大味潤（東京経済大学 非常勤講師）

1. はじめに

自動翻訳が隆盛である。ネットアクセスさえあれば外国語の知識ゼロでも翻訳が出来る時代だ。英語授業を履修している大学生も例外ではなく、日常的に使っていると考えた方が良い。大学入試共通テスト会場ですら不正が行われる時代に、学生が日常の翻訳問題に自力で取り組む保証はどこにも無い。そしてこのような学生を相手にして、旧来の英文和訳の課題は意味を成すはずもない。今回はそんな時代でどのような翻訳問題を出題すべきか、その結果学生にどのような変化が起きて来たかについての実践報告である。

2. 対象クラス

対象は2021年度に担当した大学1年生の必修2クラスである。授業外の提出課題の為、授業では最低限の解説しか行っていない。フィードバックに関しては「解答解説」のファイルを毎回作成し配布した。そこでは間違えがちなポイントや英語日本語のニュアンス等を詳細に解説し、学生各自が個別に読めば理解出来るようにしてある。但し個人差も大きいので、対面やオンラインでの質問や相談は常時受け付けていた。ちなみにコロナ禍までは提出、採点、返却そしてフィードバックまで全てを紙面で行っていたが、コロナ禍以降は、LMSで提出からフィードバックまでほぼ全て行っている。

3. AI翻訳（自動翻訳）の弱点

様々に進化してきたAI翻訳（自動翻訳）は一見どんな文章でも訳せると考えられているが、実は致命的ないくつかの欠点を未だ克服してはいない。代表的な弱点として、①文脈が読めない、②代名詞が訳せない、③不自然な日本語が修正出来ない、の3つが挙げられる。人間の読解に於いては曖昧な文であっても、直前に関連情報が述べられていたり、また後続する文の繋がりから判断したりして、正確な意味を推し当てられるが、人間としての実経験を持たないAIにはその修正が難しい。その為「前後関係を含め」「名詞代名詞を具体的に訳し」「自然な日本語に言い換えること」の3点を解答要件に含めれば、その弱点を突くことが出来る。故に自動翻訳を使用した際にも、結局学生は全文を読む羽目になり、大学生レベルの課題として成り立つことになる。またコピー問題の不正が起こることを想定し、「他人と類

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

似した解答は失格とする」と加えて置けば、不正対策はほぼ完璧となる。

4. 出題の具体例

具体例として名詞を訳す場合を挙げてみよう。例えば「students」の訳語を「生徒」か「学生」か「院生」か決めるには、その対象がどの学校に通学しているかに寄る。日本語では小学校から高校までが「生徒」、専門学校や大学生なら「学生」、大学院なら当然「院生」と訳し分ける必要がある為、文脈を考慮せざるを得ない。

「some people」も「数人」「数千人」「数百万人」等文脈によって異なり、話題が1クラスか、市町村か、国かによって単位が違う。同様に「clerk」も「店員」「行員」「事務員」等々、前後関係から判断せざるを得ない。

このように自動翻訳を使用したとしても、結局その前後、あるいは課題文全体を理解しなければ当該文の訳し様が無くなり、各自一人一人が頭を使って判断することになる。中途半端な理解では自然な日本語には成らず得点も出来ない。辞書を引いて終わりとはならない。ちなみに出題は文単位なので、翻訳作業は更に複雑になる。実際学生がどのように工夫して解答していたか、答案例の詳細は発表時に行う。

5. 結論

難易度の高いこの課題には、履修前までの英語力や学習意欲の違いは無関係で、受講者は皆真剣に取り組んでいた。その努力に応える為、教員側からは採点結果を公表するのに加え、優秀な解答については「今週の優秀答案」として掲載し賛辞を贈った。年度末に行ったアンケートではそれが学生達の学習動機に繋がっていたようで、また課題自体についての評価も全体的に非常に高かった。意外にも優秀答案の常連の学生達は、中高までの英語教育で決して高い評価を受けておらず、今回の課題を通じ自分で気付かなかった語学力に自信を持ったと口を揃えている。

翻って英語教育と言えば、概して文法理解が出来ているかに焦点が当たりがちである。時制や関係詞等の文法項目評価の中心となり、それらを使ってどこまで問題を解けるかに終始している感が否めない。結果、英語学習＝文法知識又は読解力＝単語力という図式が学生間に広まって当然である。しかしこのように僅少な部分のみが強調されてはバランスを欠くばかりでなく、語学学習として魅力も伝わるまい。

対して今回紹介した様な課題であれば、文法事項や語彙力だけでなく、学習者の日英双方の言語センスまで鍛えることが出来、他のクラスで導入する価値は十分にあると考える。更に翻訳業や通訳業そのものにも関心が出て来るであろう。本来外国語学習の目的には自らの母語を見つめ直す側面もあるはずで、今回の課題では英語学習だけでなく学生自身の日本語使用の意識が向いており成果は充分と考える。是非皆様にもそれぞれのクラスで実践頂いて、御感想をお聞かせ頂きたいと思う。

対話で伸ばす英語ディスカッション教科書の紹介

Introduction of interaction-based discussion textbook

飯野厚（法政大学）

Brian Wistner (Hosei University)

現在、公刊している『In My Opinion—話して伸ばす発信型英語演習』（飯野厚ほか、2018）が多くの大学で使用されています。本発表は、同教材の続編であり、かつ内容を充実させた2023年度発行予定の英語教科書について、教材開発の背景、目標、内容を紹介します。

教材開発の背景

高等学校までの英語学習指導要領において、言語の4技能5領域（スピーキングが「発表」と「やりとり」の2領域に）の育成が強調されています。これは、科目「英語コミュニケーション」「論理・表現」という形で具現化され2022年度より実施されます。大学英語教育においても、従来から話す・書くの発信型英語教育の重要性は認識されていますが、日本における英語教育の文脈に適した発信活動を取り込んだ教材はなかなかありません。とりわけ、大学生の知的欲求に応えるアカデミックな話題を扱ったもの、それらをインプット、インタラクション、アウトプットのスムーズな配列に言語学習もからめながら編み込んだものはさらに稀です。

本書の目標

大学生にとって興味深いアカデミックな話題をインプット、インタラクション、アウトプットのスムーズな配列におとしこみ、段階を踏んで無理なく学生の発信力を高めることです。日本の英語教育界で進む4技能化に沿って、大学英語はますますアウトプットとインタラクションを重視していく必要があります。本書は、話すために聞く、話すために読む、話した内容を書くといった技能統合による言語のアウトプットを目途としたインプット重視の教育を啓蒙します。従来の、「学んで覚えるから使う」（知識先行型）から、「使ってみて間違いながら覚える」（運用先行型）へ、英語教育のパラダイムシフトに応える教材です。

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

本書の内容

大学生、高校生、社会人問わず、賛否や問題解決を討論できる題材を軸として、聞く、話す、読む、話す、書く、の順にコミュニケーションタスクを編み込んだ日本人学習者向けの教材です。討論 (discussion) というと、硬い話題をもとに意見交換を行うことがゴールとなる活動をイメージされるかもしれませんが。本書では、硬い内容でも大学生が身近に感じやすい話題、大学生の知的好奇心を高められるようなメッセージ性のある題材を硬軟織り交ぜて提供しています。また、常に賛否両論と意思決定を伴う題材を選定し、批判的思考力を涵養します。

現場で実行可能性の高い活動を、インプット、インタラクション、アウトプット、フォーカスオンフォーム、気づき、などの SLA の理論 (仮説) に沿って配置し、使う (受容) → 気づく → 学ぶ (受容) → さらに使う (発信) → 定着 (取り込み) という学習プロセスで教育的有効性を追求しています。

学びのコンテンツとしての題材は、まずは自然な対話文 (平易なディスカッションモデル文) を聞き、会話で使えるプラグマティックな機能表現を導入します (場面・表現シラバス)。そして、プレゼンテーション原稿としても活用できる英文の学習に進みます。英文は、350 語程度の 5 パラグラフ構成のため、分量的に読み物としてもリスニング教材としても扱えます。文中には発信に資するための英文法表現や語彙も計画的に取り入れ、言語知識増強の指導にも適しています。

コミュニケーションタスクは、対話リスニング後にペアでの自由意見対話、英文理解後に 3 人 1 組のロールプレイ (ミニディベート) 形式で、聞く・読むによって得た内容と言語の知識を使うための場を提供しています。最後の社会的な役割を担った対話タスクが一旦のゴールとなる活動です。内容や英語の知識を深化させることだけでなく、それらを言葉に表して使えることがゴールです。

また、話しっぱなしで終わらせず、話しあった内容をもとにすべての学習者が意思決定者となり、自らの意見をパラグラフで書く活動も取り入れています。授業内外で、論理的に自らの意見を書くことは容易ではありませんが、話してから書く、書いてから話すという技能統合活動、つまり、学んだ知識、オーラルで使った知識 (あるいは使いきれなかった知識) をアウトプットに転化する機会を与えることで、言語学習が促進されるものと考えられます。

**An epoch-making time in the evolution of language teaching:
The era of Virtual Exchange**

Eric Hagley (Hosei University)

At a time when intercultural competency is being rated as more important than English proficiency by the Japanese Business Federation[1], it is instructive that Foreign Language (FL) study is not just the study of grammar and lexis. Communicative competency is also essential and intercultural competency is an indispensable aspect of that (ALPLP, COE, Byram). In the pre-Internet era there were no real options for students to have intercultural “moments” that were meaningful and timely. Nowadays that has changed and indeed it is now remiss of teachers of FL if they are not including intercultural moments in their syllabi.

Intercultural moments can have many forms but the most powerful are those where students actually interact with students from other cultures. Virtual Exchange (VE) ensures this can be an integral part of every FL syllabi. VE is increasingly being seen as separate to Collaborative Online International Learning (COIL) where students include international exchange as part of the study of their major (Hagley). VE is focused on FL and intercultural studies and involves international online interactions between students studying one or both of those under the guidance of teachers.

This keynote will outline the emergence of VE and how it is transforming FL classes around the world. It will detail some of the major VE that have occurred to date and introduce some that are continuing to be powerful forces for change to FL pedagogy. It will show that VE is ushering in a new era of FL teaching and learning that is inclusive of students from around the world. The benefits of this will be shared and means of ensuring your students are a part of this seminal change shared.

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

References

ALPLP Getting Started With Intercultural Language Learning,

<https://www.asiaeducation.edu.au/docs/default-source/professional-learning-pdfs/gettingstartedwithintercultural.pdf?sfvrsn=2>

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.

Hagley, E. (2020). Musings on virtual exchange in the Asia-Pacific and beyond, *Virtual exchange in the Asia-Pacific: Research and practice*, 231-240

Council of Europe, Intercultural Competence, <https://rm.coe.int/16806ad2dd>

[1] Keidanren, (2018). Policy and action

http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/029_kekka.pdf

**How to introduce your students to an international community:
the IVEProject**

Eric Hagley (Hosei University)

Do you want your students to interact with students from other countries but don't know how to organize that? Do you want your students to not only use English as an "academic" language but to use it in real-world communication? If the answer is "yes" then join this workshop! The phrase "Global community" is used a lot but is experienced by few students studying EFL. The International Virtual Exchange Project (IVEProject) is changing that. Over the last 6 years more than 37,000 students from 28 countries interacted with each other online via this project. This experience puts them in good stead to feel more confident in future international interactions. Students have authentic communication with non-native speakers and, because of this, have access to non-native use of English. Students often have to negotiate meaning because of this and acquiring this skill is essential to developing better communication. Employers will appreciate students with a better understanding of non-native English writing and speaking as these will be the people they will be communicating in English with in the coming century.

In this workshop, the project will be outlined and some results from research done on participating students presented. The research shows students with low levels of English ability increase their interactional confidence, intercultural sensitivity, knowledge of their own culture, gain motivation to learn English, and are more interested in other cultures after participating in simple virtual exchange. The IVEProject has been sponsored by the Japanese government and is free-of-charge to participate. Participants in this workshop will also have a hands on session to learn how they and their students can participate.

英語教育における授業複線化と即時フィードバックの試み A Trial of Multi-Track Classroom Design and Immediate Feedback in English Class

神谷健一 (大阪工業大学)

山内真理 (千葉商科大学)

この SIG 発表はコンテンツを徐々に増やしながら将来的に 1 つの Web サイト上に統合する構想がある 2 つの教材に基づくものである。ここでは神谷教材・山内教材と仮称しておくが、いずれも主に英語非専攻者に対する教材を想定している。英文コンテンツ素材はパブリックドメインで提供されている VOA Learning English を素材として利用している。今後これらを大学英語授業および生涯学習としての英語学習において活用していく方法を、長期的視野に立って検討していく計画である。

理論的背景はマルカム・ノールズが『成人教育の現代的実践』で再提唱した「アンドラゴジー」(Andragogy)である。語源的には「大人の教育」を意味し、古くは 19 世紀に遡る考え方である。これは「子どもの教育」である「ペダゴジー」(pedagogy)の対立概念であるとされるが、他方ペダゴジーとアンドラゴジーについてはノールズ自身も指摘するように、連続体の両端であるという考え方もあるほか、本来であれば大人であるとは言い難い中学生にアンドラゴジーの手法を適用することで成功した事例も報告されている。

アンドラゴジーは教育工学の領域では比較的良好に知られているが、残念なことに外国語教育の領域では管見の限りほとんど知られていないように思われる。

「子どもの教育」では、教師は単線的な一斉授業を行うことが一般的である。しかし「大人の教育」では複線的、すなわち開始時点を自由に選択することができるという特徴がある。「子どもの教育」で発生しがちな単線的な授業形態では、教室内での指導は平均的なレベルに焦点を当てることから、いわゆる「吹きこぼれ」「落ちこぼれ」の原因ともなる。しかし「大人の教育」の複線的な手法、例えばいつでも反復学習ができる素材を用意しておけば、この解決に繋がる可能性が見えてくる。

ここからは神谷教材・山内教材のそれぞれについて概略を述べる。神谷教材は <https://sites.google.com/view/voaleaningenglish/> にある。特徴としては 3 種類の素材(対訳つき・和文のみ・英文のみ)を用意することで、従来不足しがちであったリスニング活動を学習者が任意の方法で行うことができるようにしている。

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

すなわち対訳を見ながら英語を聴く、和文のみを見ながらどこが読まれているかを確認しながら聴く、英文のみを見ながら聴く、聴きながら同時読みを行う、シャドウイングに取り組むといったような様々な方法である。授業では解釈が難しい箇所の説明が中心となるが、学習者の質問に応じた活動を組み込むことも可能である。

即時フィードバックの試みとして、フレーズ訳から語数をヒントにして英語フレーズを入力すると、Excel 関数によって正解・不正解が分かる教材を用意している。さらにこの英語フレーズの正解集も事前に配布しておく。この手法は上級者・中級者・下級者のそれぞれが各自のレベルに合わせて学習できるという利点があり、多様な学習が予習・授業・復習の各場面で可能である。

他方、山内教材はVOA Learning EnglishのLevel 1/Level 2の動画をGoogleフォームに埋め込んだ自動採点式クイズである。動画を用いた内容理解と語彙文法復習用クイズを実践でも利用しており、<https://sites.google.com/view/yamauchi-cuc-efl-resources/voa-level-1> にまとめている。(この他にも音声変化に特化した教材もある。)

即時フィードバックの試みとして、受験後に即、解答と解説が確認でき、正解・不正解の理由が学習者自身で把握・確認できる形になっている。授業から独立させた自習でも使えるが、授業と結びつけた形で利用するために「予習」課題として取り寄せ、クイズの最後で振り返りコメントを書かせる形で発表者は利用している。

自動採点式クイズのメリットの一つは、各自のペースで、各自に必要なだけインプットを繰り返せる点である。振り返りコメントによると、同じクイズでも「すぐに理解できた者」から「何度も繰り返すことでようやく理解できた者」までばらつきがあるが、必要な反復回数や所要時間の個人差に対応することが一斉授業では難しい。この手法であれば必要な個人練習として自動採点式クイズを予習(復習)の授業外課題で利用させ、授業では競い合いやペアワーク・グループワークといった、単独ではできない活動を行うような流れも作ることができる。

参考文献

ノールズ, マルカム(2002). 堀薫夫・三輪建二(監訳)『成人教育の現代的実践:ペダゴジーからアンドラゴジーへ』, 鳳書房.

神谷健一・久田歩・多田さおり・板垣静香・森下美和(印刷中). VOA Learning English を用いた簡易 e-Learning 教材開発と2つの授業実践事例, e-Learning 教育研究, Vol. 16.

山内真理(2021). 「ニューノーマル」時代の外国語語教育: 授業・学習の「サイクル」をめぐって. 千葉商科大学紀要, 58(3), 51-86

THE 15th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

●○● 発表査読者 ●○●

Paul McBride (玉川大学)・伊藤泰子 (神田外語大学)・小張敬之 (青山学院大学)・小屋多恵子 (法政大学)・佐野富士子 (元 横浜国立大学)・下山幸成 (東洋学園大学)・鈴木健太郎 (北海道教育大学)・馬場千秋 (帝京科学大学)・藤枝豊 (共愛学園前橋国際大学)・藤尾美佐 (東洋大学)

●○● 賛助会員 LT ●○●

朝日出版社・金星堂・三修社

●○● 支部大会運営組織 ●○●

山口高領：大会委員長・運営委員長

佐竹由帆：会場校担当・当日午前午後待機

青木理香：司会

伊藤泰子：発表査読者・要綱担当

小張敬之：発表査読者・会場校担当・当日午後待機・司会

菊池尚代：広報担当

河内山晶子：司会

荊紅涛：当日午前待機

小屋多恵子：発表査読者・司会

佐野富士子：発表査読者

下山幸成：発表査読者・web 更新

鈴木彩子：当日午後待機

鈴木健太郎：広報担当・当日午前待機

田口悦男：当日午後待機

辻るりこ：賛助会員担当

西川恵：当日午後待機

馬場千秋：発表査読者・司会

渡辺彰子：司会

午前待機委員：荊・佐竹・鈴木健太郎・中山・山口

午後待機委員：小張・佐竹・鈴木彩子・田口・中山・西川・山口

●○● Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 10 ●○●

JACET-KANTO Journal Vol. 10 (JACET 関東支部紀要 第 10 号)

■原稿締切日：2022 年 8 月 31 日 (水) 23:59 JST

■原稿分量：A4 判横書き、英文 abstract、keywords、図、文献などを含めて計 20 枚以内 (日・英とも)

■応募手順：

1. 支部ホームページ上の「JACET-KANTO Journal Vol. 10 Call for papers」

をご確認ください (Refer to: <http://www.jacet-kanto.org/>)。

2. 「申し込みフォームへ」

<https://jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>

をクリックし、応募手続きを始めてください。

3. “JACET-KANTO Journal Online Submission Form” の必要事項を入力してください。

4. Form 上の “Attachment” にて、所定テンプレートによる応募原稿 (データファイル) を「オンライン提出」してください。

5. Form 上の “Submit” をクリックし、応募手続きを完了してください。

■紀要発行日：2023 年 3 月 31 日 (金) (予定)

Vol. 9 から、J-STAGE に全文 XML 掲載にすることで、掲載原稿が検索されやすく、引用されやすくなりました。

関東支部大会での発表に基づいた原稿も大歓迎です。皆様からのご投稿をお待ちしております。